
The hoped one

離宮 愛琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The hoped one

【Nコード】

N1219C

【作者名】

離宮 愛琉

【あらすじ】

「好き」この一言を言うことが、彼らにとってはどうしても難しい事だった
明日、結婚を控えている女王は彼と供に明日を望むことにした。

雨の日に（前書き）

まず、歪アリファン・ナイトメア・プロジェクトの方々へ。
真に勝手ながら、一部キャラをお借りしております。

大変に申し訳ございません。

内容に関しては、全く違うものと致しますので、あえてファンフィクションには致しませんが、これ、ひょっとして…と思われる部分を含む可能性がございます。

あらかじめご了承の上、本編をお楽しみ頂けたら幸いです。

雨の日に

…今日もまだ、雨が降り続けている…

私は城の中にある大きな窓から外の様子を見ていた。
緑に彩られたきれいな国。

私はその国の城で働いている。

「はあ…」

不意にすぐ近くからため息が聞こえた。

そちらの方を向いて私は驚いた。

「…陛下？なぜここに…？」

そこにいたのはこの国を治めている女王だった。

女王と言っても、まだ10代の半ばの少女なのだが…

少しウェーブのかかった金の髪に蒼い目をした彼女は私のすぐ隣で
同じように外を眺めていた。

「…ねえ、ビル。今日もこのまま晴れないのかしら？」

彼女は私の質問を軽く無視しながら逆に質問をしてきた。

「ええ…この様子だと、そうですね」

「そう…」

雨の音が絶え間なく聞こえる…

「一生、この雨が止まなければいいのに…」

「……陛下？」

「雨が止んだら…ビルとこうして話もできなくなるのかしら？」

雨が止むと同時に結婚をされる女王はおっしゃった。

悲しそうな笑みを浮かべて…

そして、

涙を浮かべて…

陛下？

貴女^{あなた}は私の気持ちを知っていて、
そんな事をおっしゃっているのですか…？

「…陛下は、結婚を望んではいないのですか？」

重い沈黙を破るように私の声が響いた。

「…望んでいるとするなら、雨が早く止んでほしい、と、願うので
しょうね…」

その言葉を聞き、私は決意した。

「…陛下。」

「何？ビル？」

「外へ出ましょう」

この時、私がこんな事を言わなかったら、
あるいは、

この世界は変わっていたのかもしれない。

雨の日に（後書き）

最後に。

…猫よ、ツッコまないでくれ！

（ 気にしないで下さい。 ）

12時の約束

「ちょっとビル！どこへ行くの！？」

私はビルに手を引かれ、城の中を歩き回っていた。すると突然、ビルは私の方へ向き直った。

「陛下。私は陛下を外に連れ出そうと思っています。…もし、陛下が望むのならば…ですが。」

真剣な口調で告げられた言葉は、私の胸に深く突き刺さった。

ねえ、ビル？

貴方は今、自分が何を言っているのか分かっているの？

それがどうゆう意味なのか、

それが私にとってどうゆうものなのか、

貴方は、

私の気持ちを知っていて

そんな事を言っているの……？

「…分かったわよ！行くわ！でも準備くらいさせてちょうだい！」

「…分りました。では、陛下の部屋の前で待っています。」

…本当に、もう！

何でビルはあんなに落ち着きはらってるのかしら！？

…バカ…よね？上手くななくていくはずがないのに…

「……………」

こんなに嬉しいなんて…ね？

「陛下？そろそろ準備は終わりましたか？」

「え！ああ、終わったわよ？今行くわ。」

「…陛下…」

ビルは私を見るなり飽きたように顔をおさえた。

「……何よ？」

「その格好で行くつもりですか？」

私はいつものピンクのドレスを着ていた。

「え？駄目なの？」

「……アホですか？」

「まああ！」

ビルは一度ため息をついてから私を見た。

「陛下。本当に行く気あるんですか？」

とりあえず、桃色のワンピースに着替えた後、城を出る作戦を立てた。

「じゃあ、この後12時に門を出ればいいのね？」

「ええ。私は先に出て、城下町の『チエシャ』という雑貨屋でお待ちしています。」

空が明るくなってきた…

でも、もう私には怖いモノはないわね……

12時の約束（後書き）

そろそろツツコんでくれてもいいわよ？猫？

（ 気にしないでください。 ）

木の下で

女王は雨の中、城下町を歩き回っていた。

…どうやら無事に門をぬけられたらしい。

「…っもう！この辺、よく分からないのよ！ここどこよ！？」
が、道に迷ってしまったらしい。

「…陛下？随分遅いと思ったら…何をしているのですか？」
後ろからビルの声が聞こえてきて驚いた女王は

「わぁ！」

前を通り過ぎようとしていた人にぶつかってしまった。

その人は灰色のフードをかぶり、顔の表情は見えないが、女王は何かに気付いたらしく、声をあげた。

「まぁ！貴方は…！」

「…そうゆう君こそ…」

「？」

「で、陛下。この方はどなたのですか？」

とりあえず、雨をしのげる場所に行こうと話合った三人は近くにあった木の木陰で雨宿りをしていた。

「…え。つと…」

「明日、この女王と結婚させられる筈だった者だよ。」

女王が答えるよりも先にその人が答えた。

「……………。それはその…どうしてここに？」

「僕もその女王と結婚する気はなかったんでね。逃げて来たのさ。」

「まぁ！庶民のくせによく言っわよ！」

「…悪いけど、僕は君程頭が悪くないんでね。」

「まあまあ！」

「…陛下、落ち着いてください。…貴方のお名前は？私はビルです。」

「僕かい？僕はチエシャだよ。ビル、とりあえず忠告しておくけど、『陛下』と呼ぶのは控えておいた方がいいよ。城にバレてしまうからね。」

「…そうですね…では、何とお呼びしましょうか？」

「……………」

名前を遠まわしに聞かれた女王は口をつぐんだ。

ちよつと間を置いてから、ゆつくりと言葉を発した。

「…名前は…ないの。」

雨上がりの虹

生まれた時から「女王」と呼ばれていた私には「名前」がない。
実際にはあるのかもしれないけれど、呼ばれた記憶がないのは事実。

「だから、私には名前がないの…いえ、名前が分からないの」
ちよつとの沈黙の後、チエシャが口を開いた。

「王族は基本的に名前には必要ないからね、もう随分と前から名前は
つけられなくなっているよ」

「…そうだったんですか…」

まだ降り止まない雨が音を立てている…。

湿った空気の中で三人は無言を保っていた。

「…あら？まあ…」

突然、女王は何かを見つけ声を上げた。

その目線の先には一輪の花が咲いていた。

「…アイリス…ですね。」

「…アイリス？」

「あやめの事だよ、女王。そんな事もしらないのかい？」

「な！知ってるわよそれくらい！」

「…本当かい？」

「……………」

「…そういえば…」

二人の口喧嘩を止めるようにビルが口をはさんだ。

「アイリスといえば、虹の女神という意味があるそうですね。」

「虹？あの花が？」

「ええ。」

昔、イリスと言う女神がいました。
彼女は他の神からの求愛を受け、困ったあげくに地上に降り立ちました。

その時に使った橋が虹となり、その虹の麓に咲いた花を人々は「虹の女神」と呼び、崇めるようになりました。

「私が昔聞いた話ではこんな感じでした。ですから花言葉は『恋のメッセージ』なのだそうですよ。」

「へえ……」

「…なんとなく、陛下に似てますね。」

「え？」

「いえ、なんでもないです。」

そんな二人を遠巻きに見ていたチェシャは

「バカッブルめ……」

ぽつりと呟いていました。

雨が上がり、日の光が射してきた頃。

「…では、これからは『アイリス』とお呼びしますね。」

「ええ。お願いするわ。」

女王に名前が与えられた。

雨上がりの虹（後書き）

ええ…

私が『女王』だと知っている人のみ、ちょっと。

あとは申し訳ないのですが…幻滅させてしまうかもしれません。ごめんなさい。

尚、「歪みの国のアリス」を知らない方にとっては、少し怖い部分がございます。あらかじめ、ご了承下さい。

では…まず、

ちよつと猫！私に内緒でビルとどこに行ってたのよ！？すつごく気になるから教えなさいっ！

…でないと、首狩るわよ！

それから、私はツンデレではないと何度言ったらわかるの！？

以上です。

もし、どうしても気になるようでしたら…評価の所にコメントだけでも書いて下さい。

できる限りで返信させて頂きます。

猫とアリス

「…はあ。何でこんな事になってしまったんだろう？」
森の中。

チェシヤはビルと女王アイリスの後ろを歩きながらため息をついていた。

（1時間前）

「そろそろ行きましょうか？ずっとここには見つかってしまいます。」

「そうね。…貴方はどうするの？」

「…何がだい？」

「これから、一人で隠れ住むつもりなの？」

「…いや、それは勘弁してほしいな。」

「では、途中までも一緒に来てはどうですか？」

「……………（断る理由がない）。」

「はあ。」

そんなチェシヤの背後を全力で走って来ている少女が一人いました。

「チェシヤ猫！チェシヤ猫でしょ！？」

少女はチェシヤに追いつくと、チェシヤの袖を引張りながら言いました。

「…アリス。」

チェシヤは自分よりも小さな少女を見降ろして呟きました。

「チェシヤ猫の馬鹿！私も行くって言ったじゃない！何で先に行っちゃうの！？」

「でもアリス…」

「私も一緒にいくよ！」

チェシヤはアリスの肩に手を置き、アリスの目線まで身をかがめた。

「アリス。僕は君の猫だよ。でも、君は僕のアリスじゃない。僕のせいで君が傷ついてしまうなんて事はあってはいけないんだよ。」
アリスはチェシヤから視線をはずし、うつむきながら答えた。

「……………嫌だよ。私だってチェシヤ猫のアリスだもん！絶対について行く！」

「……………」

「…アリス？まさか！あのアリス！？」

少し離れて様子を見ていた女王はアリスに駆け寄ってきた。

「…え？あ！女王様だ！久し振りだね！」

「本当にアリスなの！？まさかこんな所で会えるなんてっ！」
和気あいあいとしている二人をよそに

「……………」

「……………」

ビルとチェシヤは顔を見合せていた。

「私わたくしとアリスとは幼馴染みななのよ。もう3年以上会っていないなかったけれど。」

「うん！もうそんなになるねえ！でもまさか女王様、本物の女王様だとはずっと思っでなかったよ！」

とりあえず、ずっでそこで話している訳にはいかなかった4人は歩きながら話をしていた。

「でも、女王様。ここにいても平気なの？城下町ではもう結構な話題になってるよ？」

「まあ！そうなの！？」

「…え？」

そこまで無言で二人の聞いていたビルが急に険しい顔つきになり、少し遠くの方を見た。

その先には国の堺があった。

猫とアリス（後書き）

大変に申し訳ございませんが、ここからは私、女王と化します。
カナリの確率で意味が分からないとは思いますが…温かい心で見守
ってやって下さい。知りたい場合は今回もコメントにて返信させて
頂きます。

…何で私が「チェシャ猫のアリス」なんて書かなければならないの
よ！？

いくら仕方なかったとはいえ、アリスは私のアリスよ！

そこはちゃんと理解しなさいよね！猫！

それから…何で私は全国的に「ツンデレ」化させられてしまってい
るのよ！！

私はツンデレではないのよ！！

秘密の家（前書き）

今更ですみません。

今回気付いたのですが、「一部キャラを」と初めに申しましたが、「全てのキャラを」になってしまいました。

歪みの国のアリスのファン、ナイトメア・プロジェクトの皆様、本当に申し訳ございません。

この作品は「歪みの国のアリス」のキャラを全面に使って構成されています。

今回からも又、あらかじめご了承の上、この作品を楽しんで頂ければ幸いです。

秘密の家

「ちょっと待って下さい！」

もうすぐ国の境というところでビルが叫んだ。

「え？何？どうしたの？」

その声にアリスが反応した。

「この先に行くのは危険です。もう、きっと私達の事は国中に伝わっているでしょう。」

「なるほど。あそこまで行っても無駄と言う訳だね。」

「じゃあどうすればいいのよ！？今から戻っても噂は流れてしまっているでしょう？」

「どうしようもないじゃないか。ここで何か考えなければ連れ戻されるだけだよ。」

「だから！どうするのよ！？」

「二人とも、落ち着いてください。今、ここで争っていても仕方がないでしょう。」

「待って！私、いい考えがあるかも！！」

一連の流れを遮るようにアリスが口をはさんだ。

「…どうするんだい？アリス。」

アリスは人差し指を立てながら、少し嬉しそうに答えた。

「秘密基地わたしたちのいえでしばらく過ごすのはどう？」

森の奥深く進んだ所に大きな大木が一本、飛び抜けるように生えていた。

その上には、小さな小屋のような家が一軒、静かに佇んでいた。

「ここの事だったのね…まさかそのまま残ってるなんて…」

大木の上の家を見て女王が呟いた。

それに対してアリスは、より嬉しそうに答えた。

「うん！でも、さすがに中は掃除しないといけないみたいだよ。」

「…ここは…昔、陛下がアリスと過ごした秘密基地なのですか？」

「…ビル…」

「あ、すみません…まだ慣れてないので…」

「大丈夫よ。ここでは『陛下』でも。だってここは本当に私とアリわたくしスしか知らない場所ですもの。」

「そうだよね！ここだけは誰にも教えてなかったもんね！」

嬉しそうにはしゃいでいる二人を見ながら

「そういえば…チエシャ猫。何で君は『猫』なんですか？」

「…アリスが猫が好きだからだよ。」

「…なるほど…」

チエシャ猫とビルは素朴な会話をしていた。

秘密の家（後書き）

後書きも又、遅いのですが…

「アイリス」の名前についてです。

何故、私が女王に「アイリス」と名付けたかと言いますと、ある日、「アリス」と検索しようとした際に、誤って「アリス」と検索してしまいました。

その際に出てきたのが花の「アイリス」（あやめ）でした。これは使える！と思って使ってしまった次第です。

単純ですね。

でも私はそんなヤツなんです。

本当に皆さん、ごめんなさい！！

私は「歪みの国のアリス」が大好きです！！

でもまだ「包帯女」止まりです！

何で私は女王を知っているんだああ！？

…。すみませんでした。

鎌と箒

「うわぁ… やっぱり埃だらけっ！でも本当にそのままだね！」

秘密の家に入ってからのアリスの第一声。

家の中は埃だらけで全てが白い世界。

足を踏み入れるとその足跡がつくくらいの汚れ様だ。

「さて、まずは掃除ね！いくらなんでもこのままでは住めないものね！」

「陛下… なんだか楽しそうですね。」

「え？そうかしら？」

そう言うそばから女王は箒を片手に踊るように掃除を始めた。

「君は一体何でアレを好きになったんだい？僕には到底、理解出来ないね。」

そんな女王を見て、チェシャ猫がビルにしか聞こえないような声で言った。

「…え？何で…」

「勘はいい方だね。」

「…………… 何ででしょう…。」

「ねえ、女王様。女王様ってビルが好きなの？」

楽しそうに先に掃除を始めていたアリスが突然、女王にしか聞こえない声で話しかけた。

「な…！／＼／」

「私さ、勘はいいんだよ！」

「……………」

女王はうつ向いてゆっくりと頷いた。

「やっぱり？じゃあさ、ビルはどうなの？もう聞いた？」

その言葉を聞き、女王は勢いよく顔を上げた。

「そんな…聞けないわよ！」

「どうして？そんなに仲がいいのに？」

「私がそんな事を言ったら…」

女王は部屋の隅で埃を被っていた鎌を見つめた。

「あ…ごめんなさい！！」

「これは、どうしようもない事だから…仕方ないのよ。」
そう言った女王の顔は寂しそうに笑っていた。

大切なものほど

傷付けてしまいやすい。

大切だから

自分の側には置いておけない。

矛盾した世界だから

愛する事が

尊いんだ

鎌と箒（後書き）

鎌：何で鎌なのかって？

次回、書いておくつもりです。

でも、予定は未定。

ははは（笑）

甘い物の食べ過ぎに注意！

頭がおかしくなりますよ。（誰！？

最近聞いた話ですと…

「あとがきが面白いんだよね」

だ、そうです…

嬉しいような…

悲しいような…

更に言うと、

あとがき書く方が楽しいんですよ。

なんとなくですよ！！！！

そしていつも、

本編より長いんじゃないかって…

ひやひやもんです。

ほらね、甘いものは食べすぎちゃいけないんです。
文体がバラバラです。

更に、

女王である私が

「猫が好き」って

言っちゃんしんごですか...

夢の狭間で

4人が掃除を始めてから1時間。

外はもう日が沈んでいて空はオレンジ色に染まっていた。

家の中はというと、最初の埃だらけな家からは想像ができない程綺麗になっていた。

中にはテーブルやイスの他に一応はベットも置かれているらしい。

木枠の窓の傍には例の鎌が立てかけられていた。

「やっと綺麗になったね。でも、女王様。そろそろ行かないと日が暮れちゃうよ?」

「ああ!そうだったわね!」

女王は手に鎌を取り、大きなバスケットを手にしたアリスと共に家の外へ出ようとした。

「どこへ行くのですか?」

「あ、ビルも一緒に来る?今の時期だと...ちょっと届かないかもしれないから...」

「.....はい?」

外に出て数分歩いた所。

そこにはたくさんの実をつけた桃やさくらんぼがあった。

「...すごいですね.....」

そんな木々を見上げながらビルが呟いた。

「もう少しするとあっちの梨も実になるわよ?でも、どうしても手が届かなくて...」

「なるほど。それで鎌なんて持ってきたのですね?大丈夫ですよ。

私なら届きますから。」

「まあ!私が小さいとでも言いたいのか^{わたくし}!?」

「まあ...そうですね。」

空は、だんだんと藍色に染まっていた。

「ねえ、チエシャ猫。本当はビルも…」

家に残っていたアリスは窓の外を見ながらチエシャ猫に話しかけた。

「ああ。そうだよ…女王もなんだろう？」

「…うん。…何でだろうね？おかしいよ…」

「アリス。現実はいつでも残酷なものだよ？だから夢を見る事ができるんだよ。」

「…私たちは、夢を少しでも長く、見せてあげようね………」

暫くして、扉の開く音が聞こえた。

「ただいま！アリス！」

「あ！おかえりなさい！」

終わらない夢なんてない。

そんなの分かりきったこと

でも、

信じるしかなかったんだ。

夢の狭間で（後書き）

…眠いです。

一日一回更新はきついです；

今日なんかもうギリギリ……

何を打っているのかさえ分からなくなってきました；

…でも、あの人に「が」をツツこまれなくて良かった（笑）

「も」って書いてましたから；

あ。今日はこの辺で。

叶えたいコト

「ところで…この家にはいつまでいるつもりなの？あまり長くいても見つかってしまうわよ？」

ロウソクの火の光で照らされた部屋の中。

4人は床に座って話していた。

「それなんですが…しばらくここにいた方が逆にいいかもしれませんが。」

「え？何で？いくら誰にも教えてないって言っても、お城で搜索してるんだよ！？見つかったらどうよ！」

アリスのもっともな意見に対しビルは…

「私の予想では…城の人々はきつと国外で私達を搜索していると思うんです。」

こう切り返した。

「なるほど。灯台もと暗しって訳だね？」

「ええ。そうなるここににいる方が安全かと……」

「それはいいとして、君らはこのまま逃げ回ってどうするつもりなんだい？最終的な目的はあるのかい？」

部屋の中が静まり返る。

ロウソクの炎が揺れる音が聞こえた。

「…無いのかい？」

「…ある…けど、言えないわ。」

また、しばらくの沈黙…。

「あ！えっと！ほら！それはまた今度でいいじゃない！どっち道ここにいないといけないんでしょ！？それより！今日は遅いからもう寝ましようよ！」

アリスはそう言うと言ち上がった。

「明日は色々やる事があるから！早く起きてね！？」

「分ったよ、アリス。今日はもう寝るとしよう。じゃあ、ビル。僕

らはここで寝ることでしょうか。」

「そうですね。…では……」

「あ！いいよ！ベット使ってくれて！私たちは外に行くから！」
そう言つて、アリスは女王の手を引いた。

「行こう！女王様！」

「え？あ…ああ！そうね！」

二人は家を飛び出して行つた。

残された二人は…

「…ビル。僕らつて、時々邪魔にされているように思つただけど…」

「…貴方もでしたか……」

また、素朴な会話をしていた。

家の外。

そこからほど遠くない所に大きな穴の空いた木があつた。

その中に女王とアリスがいた。

「ここも全然変わつてないわね…忘れちゃいそうだったけど。」

「ね！……女王様。女王様の目的つてやっぱり…」

女王は静かに頷くと口を開いた。

「伝えるだけは、伝えたいな、と思つたのよ。一方的なら、ビルに何の危害も出さなくて済むから。」

「そつか…。うん、いいね。…でも、きっと……」

「え？」

「あ！何でもないよ！？…そろそろ寝よう！」

「そつね。おやすみ、アリス。」

良い夢を。

叶えたいコト（後書き）

…お待たせしました！

もう10時半です；

ごめんなさい！！でも、頑張りました（笑）

今日は時間がないのであとは短めに！

さらっと

えー。

今回はですね、一部、影響された部分があるんですよ！

猫とビルの痛々しいところが！（笑）

だって…内職なんですもん…w

気になりますか？

気にしないでください！

昔の思い出

冷たい空気を感じる…

ポツポツと軽快なリズムが聞こえる。

雨の匂い

「一応は予想はしていたけれど……まさかここまで見事だとはねえ……」

女王がぼやくように言った。

「ま、仕方ないよ、こればかりは……」

雨のせいで今日の予定がなくなった4人は家の中で雑談をしていた。
「アリス。もし予定があっていたとしたら何をするつもりだったんだい？」

「ベットはもう1つは必要でしょ？幸いここには材料がいっぱいあるし！あとは椅子ね。ずっと立ったままじゃ疲れるでしょ？」

なるほど、と言ってからチェシャ猫は何かに気づき、そういえば、と続けた。

「……ずっと気になっていたんだけど……この家は一体誰が建てたんだい？まさかアリスと女王だけで建てた訳ではないだろう？」

そこで一旦会話が途切れる。
数秒経ってから女王が答えた。

「……ずっと前の事だから、あまり覚えてないけれど……私達がまだ小さかった時に私達より3つくらい歳上だったかしら？男の子と一緒に建てたのよ。」

「……その人は今、どうしているんだい？もし、その人がその事を言うってしまったら……」

そこで、今まで黙っていたビルが口を開いた。

「大丈夫ですよ。その心配はありません。」

「何でだい？」

チエシヤ猫の質問にビルは微笑し、
「なんとなく、ですよ。」
そう一言答えた。

それからしばらくして、女王がいきなりあつ！と声をあげた。
「どうしたんですか？」

「…ちよつと、確認しないと……」
そう言つと、女王は家を飛び出して行つた。
「…陛下？……あ！」

ビルも何かに気づき、女王の後を追う。
「…何だろうね？まだ雨降つてるのに……！ああ……」
不思議そうにしていたアリスも声をあげた。

「どうしたんだい？アリス。」
「忘れてた！…もう遅いか……」
そう言つてアリスは窓の外を見た。

「陛下！」

ビルは雨の中を走り回っていた。

「ビル！ほらみなさい！やっぱり私が取つたわよ！」

「まさか、陛下に先を越されるなんて…思つてもみませんでしたよ。」

女王の手には、小さなボールがあつた。

「約束は約束よ！ちゃんと守りなさいね！」

「分りましたよ、陛下。」

「で。君らは一体何をしていたんだい？」

今まで何の意味も分からないまま家にいたチエシヤ猫は3人に言った。

「さっきの男の子って私だったんですよ。」

「そうそう！で、昔遊んでた時にボールをね、木に引っかけちゃって取れなかったの。」

「で、それを取った人の願いは聞かなきゃいけないって言ったのよ。」

3人はこう答えた。

見事なチームワークにチエシヤ猫は哑然としている。

「そういえば、陛下の願いつて何ですか？」

「え？…そのうち叶えてもらうわ。」

昔の思い出（後書き）

今回は長めに！

いつもいつもこんなのに付き合って下さり、ありがとうございます！！

最近思ってたんですけど、これって何か日記化してますよね？

すみません；；

正直、あとがきって何のためにあるのか分かんないんですよ！でも、楽しいんですよ！（笑）

いや、今日は何故か雨が降ってしまいましたね。

電車で学校から帰らにやならんかったのですよ！

んでその時にコレを書いてたんですけどね、

何しろ文字がメールより明らかに多いですからね！

すごい変な目で見られましたよ；

見られたら恥ずかしいじゃあないですか！

だから必死で隠してたんですけど、余計に変な目で見られました；；；

さてさて、

このThe hoped oneもそろそろ作者としては面白くなってきました！

腐れ！青少年よ！（笑）

これからは恋愛要素をバシバシ入れていきます！
宜しく願います！

迷いと本音

昨日とはうって変わり、今日は晴天だった。

でも、なんとなく体が重い……

「陛下？顔が赤いですよ。どうかしましたか？」

昨日やる予定だった『必需品づくり』を猫と一緒にしていたビルが声をかけてきた。

「え？そうかしら……？」

「あ！本当だ。女王様、大丈夫？」

アリスも心配そうに尋ねてくる。

「え？大丈夫よ。これくらい………！？」

いきなり体が宙に浮いた。

それと同時にビルの顔が近づく。

「陛下。昨日の雨で風邪を引いたのではないのですか？今日は休んでいて下さい。」

自分がお姫様だっこされているのに気付き、私は赤面した。

「な……！ちよ、ちよっと！下ろしなさいよっ！恥ずかしいじゃない！」

「そうですか？じゃあ……」

私は一回地上に下ろされた。ホッとしたのもつかの間、また体が宙に浮いた。

今度は背中が近づく。

「おんぶなら、恥ずかしくないですね？」

そう言っただけは家に向け、歩き始めた。

「もう！いいわよ！」

諦めて、彼の背中に身を預けた。

懐かしいような感覚……。

昔はもつと素直に色々な事ができたのに……。
今ではそれさえも難しい。

「なんか懐かしいですね、こうゆうの。」

まだ少しぬかるんでいる地面を歩きながら彼は話掛けてきた。
どうやら私と同じ様な事を考えていたみたいだ。

「そうね。でも昔みたいに私は怪我ばかりしないわよ!？」

「そうですか、…そうですね」

ビルは微笑しながら答えた。

「何がおかしいのよっ!」

「いえ、何でもありませんよ」

そうこうしている内に家に着いた。

私はベットの上へ下ろされた。

「しばらくの間はちゃんと寝ていて下さいね。何かあったら呼んで下さい」

「待つて!」

用なんてないのに引き止めてしまった……。

ビルはこちらに向かって来て、隣に腰を下ろした。

「何ですか？」

「どうしよう……」

頭が何かに触れた。

「っ! !ごめんなさい! !」

気がつかない内にビルに寄りかかっていた。

思わず下を向く。

きつと顔、真っ赤だわ……

「大丈夫ですよ。辛いなら寄りかかって下さっても」

「いや、でもっ……! !」

また、体が傾いていく。

「我慢するのも昔と変わらないですね」

そう言いながらビルは笑っていた。

「何よ! もうっ!」

すねたフリをしながら斜め上のビルの顔を眺める。

そっいえば、昔からビルの事が好きだったのだったっけ…?

今では理由なんて覚えてないけれど。

まさかこんな事になるなんて……

私と会わなかったら、貴方はもっと幸せな人生を送っていたのかしら？

「……ごめんなさい」

「どうしたんですか？陛下」

「ビル、あのね……ずっと昔から」

風邪をひいて、

頭が回らなかったから

本当は言うつもりじゃなかった……。

「好きだったの」

迷いと本音（後書き）

…フ。

何ですか？

私が何かしましたか？

この間、忠告したはずですよ？

『腐れ！青少年よ！』と。（笑）

いいじゃないですか。

ちよつとばかり展開が早くつたって！

どっち道腐る事には変わらないし！

何より楽しいし！

あははははははは！！！！

すみません、壊れてます…。

いやあ、現実になんかそうゆうのがないと

こっちの方に突っ走るしかないんですよ（泣）

あ…1日一回投稿できなかった…

ま、いいですよ！

今日、2回すればいいんだ！！

キツイなあ…

頑張ります

未来への一歩

「……陛下？」

私は思いもよらぬ彼女の発言に耳を疑った。

手に入るものではないとずっと妥協していたのに……
頭が混乱する。

そんな夢みたいない状況があるはずがない……。

でも、今、彼女は私を好きだと言った。

「え？……ビル？」

思わず彼女を抱き締める。

「陛下、ずるいですよ。私よりも先に言うなんて」

「……え？」

「私だつて、ずっと陛下の事を想ってきました。本当は言つつもり
なんてなかったですけど……私は陛下を愛しています」

「……本当に？」

「ええ。……信じられませんか？」

何故だろう？

とても愛しい。

ずっとこのままでいたい……。

「……！ビルの馬鹿！」

肩越しにでも彼女が赤くなっているのが分かる。

本当に愛しい。

「照れている陛下も可愛いですよ」

「……！もう！離してよっ！ビル！？」

私はさつきよりも強く彼女を抱き締めた。

「嫌です。絶対に離しません」

「でもっ！風邪がうつつちゃうわよ！？」

「陛下の風邪なら、構いませんよ？」

「もう！いいわよ！！！」

そんな彼女となると、本当に、今の状況を忘れる事ができる。

でも…

「…陛下。一つ聞いていいですか？」

「え？」

「この先、ずっとこの生活を続けていくのは不可能です。いつかは必ず見つかってしまいます。その時、陛下はどうしたいのですか？もし、城に戻るという選択をした場合は、私は姿を消さなければなりません。そして、違う選択をした場合、陛下も一生逃げていかなければなりません。それでも、いいのですか？」

彼女は、一つ間を置いてから答えた。

「…いいわ。ビルが一緒ならどんな人生だって」

彼女のその一言は私の心に大きく響いた。

未来への一歩（後書き）

見返してみても…

決めました。

これは期間限定ものにします！

夏季限定です！

ヤバイです！

以上に恥ずかしいっ！／＼／

なんなんだ！？このあり得ない展開はっ！！

あゝ！！！！！！

…嘘です。

期間限定にはしません。

でも、笑わないで下さいね？

影響

「で、ビル。今まで何をしていたんだい？随分と遅かったじゃないか」

「いえ、…ちょっと」

…分かりやすいな…。

ふっ。バカップルめ……

「わかってるよ。女王と何かあったんだろっ？例えば…告白されるとか……」

「……貴方は、本当に勘がいいんですね」

「えっ！？そうなの！？」

「で、どうしたんだい？断ったりはしていないんだろっ？」

「……まあ」

…本当に分かりやすい。

「ビル！おめでとう！」

「えっと…ありがとうございます……」

……む。

「で、ビル。女王は今、どうしているんだい？」

「ちゃんと寝ていますよ。ちょっと熱があったみたいですから」

「え？何で分かるの？」

「……それは……」

「アリス。そこはツツコンじゃいけないよ」

「何で？」

羨ましくなるからだよ。

「そういうものだよ」

「そうなんだ？」

「さあ、もう少しで終わるからやってしまおう」

「そうですね」

……本当に。

ノロケは勘弁してほしいよ。

「はあ。」

「どうしたの？チエシヤ猫？」

「何でもないよ、アリス」

次の日

「で、全部終わったのはいいものの……」

「やる事、なくなっちゃったね！」

「陛下は、もう体の方は大丈夫ですか？」

「ええ。大丈夫みたいよ」

全く。

こんなバカップルと一緒になんて。

「アリス」

「ん？なあに？」

「君は『僕のアリス』になってくれるかい？」

「え……。う……。ん……」

僕らも影響されてしまうだろう？

影響（後書き）

ふん。

別に認めたから書いた訳じゃないのよ！？

あまりにもネタが無かったからよっ！

正直、キツイのよ！

あゝ！もう！

リアルに恋しちゃうとダメですね；

赤い糸

「暑いわね……」

梅雨が明け、強くなった陽射しの中。

女王は一人、木漏れ日の下で呟いていました。

「陛下？何をしていますのですか？」

そんな女王を見つけ、ビルが声を掛けた。

「……え？ビル！？何でここにいるの！？」

「それはその……たまたまですよ」

と、言いつつ、実はずっと探しまわっていたビルは額に少し汗がにじんでる。

「で、何をしていますのですか？」

「………何でもないわよ？」

10秒位経ってから返事が返ってきた。

「何なんですか、その間は。……何か隠していませんか？」

「なっ！何にもないったら！」

ビルは焦ったように返事をする女王に一言。

「浮気、ですか？」

それに対し女王は顔を真っ赤にしてうつ向いた。

「本当に……そうなんですか？」

「違うわよ！！もう！いいからついて来ないでよ！？」

「………陛下？」

ビルは後ろから女王を抱き締めた。

「……ちょ……！」

「行かないで下さい」

「だから！違うつて言ってるじゃない！………もう！」

「……何が違うんですか？」

「それは………」

そこで女王は口をつぐんだ。

数秒の後。

「絶対に…笑わないでよ?」

そこには一本の小さな木がありました。

周りの木より小さく、その枝には小さいリボンが結ばれています。

「……これは?」

そのリボンに書かれていた文字を見て、ビルが女王に尋ねた。

「もう!だから嫌だって言ったのよ!」

女王は顔を赤らめながら答えます。

そのリボンには

『ビルとずっと一緒にいられますように』

こう書かれていました。

「陛下が書いたのですか?」

女王は返事をする代わりに頷き、そのまま後ろを向いた。

「陛下……」

「アリスがそうしたら願いが叶うって言ってたから…やってみただけよっ!」

そんな女王にビルはそつと近付き、また後ろから抱き締めました。

「大丈夫ですよ、陛下。私は陛下が望むのならずと貴女の傍にいます。逆に、もう放したりしませんよ?」

「もう!そんなんじゃないって言ってるじゃない!」

「…そうですか?」

「…っ!分かってるくせにっ!」

そこは、優しい風が吹いていました。

赤い糸（後書き）

え？キャラが微妙に変わってないかって？

…そうですか？

私のイメージの中ではずっとこうでしたが？
いや、そうさせられてしまっていましたか？
全部疑問形だって？

気にしない方がいいですよ？

貴方…ビルじゃないですよ？

変な質問するなって？

ま、いいんじゃないですか？

え？

私のリアルな恋についてですか？

あれは自虐に近いですよ？

なんかだんだんおかしくなってきましたね？

また文句を言われそうですね…？

勘弁してくださいね？

あれはイタイですよ？

真面目に、ですよ？

皆さん、こんな私を許してくれますか？

ごめんなさい！；

湖畔にて

「そういえば、夏と言えば毎年近くの湖に行ってたよね!」

初夏。まだ涼しさの残る朝。

彼らは今日の予定を立てていた。

「そういえばそうだったわね! ねえ、今日行ってみましょうよ!」

「そうですね。たまにはそうゆうのもいいかもしれません」

皆が行く気になっている中、一人、チエシャ猫だけあまり乗り気ではなさそうだった。

そんなチエシャ猫に気付き、アリスが声を掛ける。

「どうしたの? チエシャ猫」

「アリス、湖に行くのかい?」

「うん。そうしようと思ってるけど… チエシャ猫は嫌?」

「……………」

「まさか…… 泳げない、とかじゃないでしょうね?」

女王のその言葉にチエシャ猫は声を張った。

「そんな訳ないじゃないか」

「チエシャ猫? 無理しなくてもいいんだよ?」

「大丈夫だよ、アリス」

そう言ったチエシャ猫の顔は少しこわばっていた。

「で? どこが大丈夫なのよ?」

そこは美しい湖でした。

水は透き通っていて、蒼く染まっています。

その水の中から遠ざかる様に、一人、チエシャ猫が3人を眺めていました。

「僕はね、泳げるけど水は苦手なんだよ」

「なによ、その屁理屈」

「本当に猫みたいですね、水が苦手なんて」

「えー？そうなら先に言ってくればよかったのに」

「アリスがここへ来たかったんだろ？僕はアリスが望むのならどこへでもついて行くよ？」

「……ありがとう……」

そんな二人を見ていた女王は…

「なんか……ちょっと悔しいわね」

「…何がですか？」

「猫なんかアリスを取られたって気分よ」

「……陛下」

「何？ビル」

「私も、ですよ。アリスに陛下を取られた気分です」

「え？いや、でもそれは……」

「陛下。もうアリスにはやきもちを妬かないで下さい」

「な！そんな事を言われても……」

「それに、陛下には私がいいます。私では不服ですか？」

「…そんな訳ないじゃない」

「では、もう彼らの事は放っておきましょう」

「いや、でも……」

その瞬間、二人の距離が急激に縮んだ。

「ビル！今、キ…／／／」

「あんまり私を甘く見ないで下さいね、陛下」

「…／／／ビルの馬鹿！」

湖畔にて（後書き）

何か？

だって今日は雨が降ったのに会えなかったんですもん。
そりゃ、こっちにも走りたくなります。

私は所詮、妄想の中でしか生きられない女ですよ！

そこ！ずっと男だと思ってたって！！？

別にいいもん！

逆に口説いちゃうから

執事じゃないけどね（笑）

え？

気にしたら負け、ですよ。

過去の理由

日が傾き出した夕方。

3人はまだ湖畔にいた。

アリスと女王は遊び疲れて眠ってしまったている。

そんな二人を見て、ビルとチェシャ猫は話していた。

「水は……大丈夫になったのですか？」

「ああ。アリスのお陰で少しはね」

「……そうですか」

いつもの事ながら、話しは続かない。

少しの間があってからビルが続けた。

「そういえば、チェシャ猫とアリスってどこで知り合ったんです？」

「きつと君らが城に閉じ込められて間もなくだよ。僕は親を失って

ね、路地裏で小さくなっていた僕をアリスが拾ってくれたんだ……」

「……そうだったんですか」

「ビル、いつも気になっていたんだけど……何で君はいつも敬語な

んだい？」

「私はそうゆう身分なんですよ」

特に表情を変えないまま、二人の会話は続く。

「どうゆう身分なんだい？」

「私の両親は……この国の反乱者なんです。私は二人に捨てられました。反乱に反対する、言うことを聞かない役立たずとして。そして、城に拾われたんです」

「城の人間は、その事を知っていたのかい？」

「いえ。陛下以外には言っていないですよ。陛下に止められました。言ったら追い出されるだろうと」

「それは、賢明な判断だったと思うよ。あの女王にしては。でもビル、女王は君の事情を知っているんだろう？なら別に気にする事ないじゃないか」

「私が嫌なんです。陛下にそんな下げ染むような扱いをしたくはありません」

「君らは恋人なんじゃないのかい？」

「え？そつですけど、でも……」

「君は良くても女王はどうなんだい？僕は君に敬語ではあまり話されたくないと思っているよ」

「……そつですか」

「もう僕らは共犯者だろう？仲間なんだから、別にこだわらなくてもいいと思うよ」

「分かったよ。これからはなるべく敬語は使わない事とするよ……ただ」

「ただ？」

「陛下にそうするのは難しいかもしれないな」

それからしばらくした後、アリスが目を覚ました。

日はもうすっかり暮れていた。

「おはよー……」

アリスか目を擦りながら起き上がる。

「もう夜だよ、アリス。家に帰ろう」

「うん。行こう、チェシャ猫。あれ？女王様はまだ寝てるの？」

「そうですね、先に行っていて下さい」

「うん。分かった」

二人が去ってから少しして、ビルは女王の横に腰を下ろした。

「出来るわけ、ないですよ」

「敬語の話？別に私は嫌ではないけれど、何で私にだけ駄目なの？」
すぐ隣から、当たり前前の様に女王の声がした。

「陛下？起きていたんですか？」

「ええ。随分と前から。猫にあの事言っただでしょう？」

「………そんなに前から起きてたんですか」

「猫がアリスに拾われた辺りからね。で、何で私には敬語なの？」

「……昔、町に出て、城に戻された時の事、覚えていますか？」

「ええ」

「あの時、私は陛下に敬語を使っていませんでした。それを聞かれ
てしまって、私はしばらく陛下に会えなくなりました。……あの頃
から、陛下が好きだったんですよ。陛下に会えないのがどうしても
嫌で、日頃から敬語を使う様になってきました。だから、ですか。敬
語を使わないと陛下を失ってしまう様な気がして……嫌なんです」

女王は微笑みながらビルの顔を見た。

「馬鹿ね」

「そうですね」

女王は起き上がるとビルの肩に頭を預けた。

「私なんて、もっと前からビルが好きだったのよ？出会った時から
ね。」

「そうだったんですか？」

「馬鹿……でしょう？」

「いえ、嬉しいですよ」

「でも、今はそれ以上に好き」

「……陛下？ひょっとして、寝惚けてますか？」

「さあ？どうでしょうね」

過去の理由（後書き）

愛する人ができました。

でも、なかなか会う事ができません。
会いたいです。

でも、会おうと思って会えるような相手ではありません。
あとがきにこんな事を書くはめになるとは…
なんとなく、誰かに聞いて貰いたいんです。

私はまた懲りもせず吹奏楽部員です。

ちなみに副部長なんてやつちゃってます（笑）

で、ここで問題が発生しました。

「楽譜を中学校から借りてこい」

そう先生、先輩に言われました。

でも、ですね。

私の好きだった後輩はまだそこにいます。

色んな情報が私の耳に届きます。

あの人は、

私を笑いの種にしているようです。

私には今、好きな人がいます。

名前も、高校も分かりません。

…今回はもう長いので、次にまた、読んで貰えますか？

新たな旅立ち

それはある日の夕暮れ。

突然、外へ出ていたアリスが走って家の中に飛込んできた。

「どうしたの？アリス。そんな走って……」

「皆！来た！静かにしてっ！」

しばらくすると外から声が聞こえてきた。

「なあ、やっぱりここらにはいないんじゃないか？」

「だよな。いくら他国にいないからって陛下がこんな森の中にいるなんて考えられないぞ」

「仕方ない。国王の命令だからな」

「そうだな。あっちの方にも行ってみるか？」

そう聞こえ、足音は遠くに消えていった。

「……思った以上に早かったですね」

壁に耳をそばだてていたビルが足音がなくなったのを確認し、言った。

「こうなるともう、時間の問題だよ。すぐにここを出た方がいい」

「そうね。今夜にでも出発した方がいいかもしれないわ」

皆、いつになく真剣な面持ちをしていた。

4人は少し相談をしてから、できるだけ物音を立てないように準備を始めた。

夕暮れが過ぎ、空に闇が広がる。

その頃になると、4人は準備を終え、出発をするため外に出た。

辺りには地面を照らすような物は何一つない。

空には雲がかかり始め、月明かりもそこまでは届かない。

暗い夜道を4人は歩き出した。

「ねえ、この国を出て、どこへ行くつもりなの？」

無言に耐えられなくなった女王が口を開いた。

「そうですね：他国に逃げたとしても私達の事は伝わっているでし

ようし……」

「私達はともかく、女王様は何かしないとバレちゃうね……」

「男装でもしたらどうだい？」

それを聞いて憤慨している女王に、ビルは

「それ、いいかもしれませんね」

笑顔で言つてのけた。

「へえ…猫のフードの中つてそんなだつたのね」

今まで猫の着ていたフードを被りながら女王は呟いた。

その目線の先には少し幼い感じのする男の子が立っていた。

「だから嫌だつて言つたんだ」

男の子はそう言つた。声からすると恐らくチエシヤ猫の様だ。

「身長と顔が合つてないわよ？」

「大きなお世話だよ」

「正直言つと言動も合つてないよね」

アリスにもそう言われ、チエシヤ猫は黙ってしまった。

「さて、陛下…ちゃんと男装しましょうか？」

そう言われた女王は少し躊躇いながらもチエシヤ猫のフードを着た。

髪は中に入れ、完全に見えないようにする。

「暑い……」

「…本当にそれだけでもチエシヤ猫に見える……」

そう言つたアリスに、チエシヤ猫は

「それは誉めているのかい？アリス」

そう言つた。

新たな旅立ち（後書き）

いやあ…どうも。

えっと、ですね

この間の後書き、無かった事にしてくれませんか？
かなりイタイんで、もう無かった事にしたいです；

あ、ちなみに、ですね。

私、明日テストなんですよ！

つてか全く勉強してないんですよ！

夏休みは部活したいんですよ！

だから平均点は取りたかったんですよ！

もう無理なんですよ！

誰か、助けてくださいよっつ！！！！！！！！

別れ

4人は無事、国境を越え、国を出た。

国の外には一面の草原が広がっていた。

「…すごい！国の外がこんなになっていたなんて！」

「アイリスは他国に何度か行った事があつたのではなかったのですか？」

はしゃいでいる女王を横目にビルが聞いた。

「いつも馬車の中だもの。外の景色なんて見た事は一度もなかったわ」

女王は遠くまで広がる草原を見渡しながと言った。

「…あの、アイリスさん？何かね、チエシャ猫が言っているみたいで変な感じがするんだけど……」

しばらくの沈黙の後、アリスとアイリスとビルが一斉に吹き出した。

「失礼だな。僕とそこの変なのと一緒にしないでくれ」

「私だつて願ひ下げよっ！」

そうして笑いながらも隣国の町に着いた。

そこは小さいながらも活気のある町でした。

あちこちに散らばるようになしてお店が立ち並んでいます。

「やあ！久しぶりだねえ、他国から人が来るなんて！」

「観光かい？珍しいね、今年の夏前から他国から人があんまり来なくなつたんだよ。ゆつくりしていきな！」

行き交う人々に声をかけられながら歩いていった4人はあるものを見つけた。

「まさか…そんな……」

女王が見ている先には

『wanted』の文字。

そしてその上にはビルの写真がありました。

「いたぞ！あそこだっ！」

向こうから兵士と思われる何人かがこちらに向かってきているようだ。

「大変っ！早く逃げないと……！」

アリスはそう言ったが、女王はアリスの手を掴み、首を振った。

「え……？」

「アリス、元気でね」

女王はアリスの手を放し、ビルを掴んで走り出した。

「……えっ……待って！」

アリスの声に返事を返す事もなく、女王は走り続けた。

「アイリス？何をしているのですか？」

その隣で走っていたビルが女王に問掛けた。

少しの間を開けてから女王が返事をする。

「あの二人は追われている訳ではないわ。こうした方がアリス達にとってはいいのよ」

「……なるほど」

そうして二人は町を抜けていった。

別れ（後書き）

そろそろ終わりです！！！！！

只今、異常に腰が痛いです！！！！！！

誰か助けて下さいっ……！！！！！！

壁

「また、ふりだしに戻っちゃったわね……」

二人は町外れの路地裏にいた。

薄暗いそこには何もなく、人のいる様な雰囲気はなかった。

「でも、後退はしていません。大丈夫ですよ」

「……でも、こんな事になるのなら……」

そこまで言って女王は足を止めた。

「……嘘……」

「……王様？」

その瞬間、女王は後ろから二人に腕を掴まれ、ビルは後ろ手にされ、捕まった。

二人の目線の先には赤いマントを身に纏った王様が立っていた。

「女王、探すのに苦労したよ。しかし無事でいてくれて何よりだよ」
そう女王に笑顔を向けて王様は言った。

「安心なさい。全てなかった事にするから、何も心配する事は無い」

それを聞いた女王は顔をしかめた。

「……なかった事……？ だったらビルを放して！ どうして捕まえるの！？」

女王は掴まれていた腕を振りほどいた。

「……女王、少し落ち着きなさい。そればかりはどうしても見逃す事はできないんだよ」

「どうしてよ！ 私の我が儘でこんな事になったっていうのに……これ以上どうしようって言うのよ！」

その場の空気が固まった。

王様は女王の肩に手を置き、ゆっくりと語りかけた。

「女王、君は国民全ての命を賭けてまで、その者を助けたいかい？」

「私だってこんな事は望んでいない。でも、仕方ないんだ」

「……国民全ての命？」

その女王の問掛けに王様は頷いた。

「隣国の王子がお前との婚約を望んでいる。……断れば戦争を行うという圧力付きで」

選択した道

どうしてか世界は上手くいかない。

望むものの程手に入りにくい。

だからこそ何かを成し遂げる事に意味がある

そう思ったとしても

私の目の前にある理不尽な壁は
私がいくらかがいたとしても
決して臆する事はないのだろう

「女王」なんて
なりたくてなつた訳ではないのに……

気が付いたら私は城に連れ戻され、自分の部屋のベットのの上に腰掛け、夕暮れの近い窓の外を眺めていた。

そこにドアを開け誰かが入ってきた。

「女王様、王様がお呼びです」

そう呼ばれ、私は王のいる部屋まで案内された。
そこには椅子に腰掛けた王が座っていた。

「女王、少しは落ち着いたか？」

「…そうね、でも納得はしていないわ」

「そうか…」

王はそう言い、黙った。

「……………何か…あるの？」

その沈黙に違和感を感じた私は尋ねた。

「…刑罰は死刑となった」

「そんなの…っそんなの私は認めない！」

「今日の夕方、とり行われる」

「…えっ……………」

私は慌ててその部屋を飛び出した。

「待ちなさい女王！君が行ったところで辛い思いをするだけだ！」

そう言われ、私は立ち止まった。

「…君が行ったところで、どうする事も出来ないんだよ……………」

…何で？

ビルはただ私の我が儘を聞いてくれただけじゃない。

何か悪い事をしたの？

罰を受けるべき私には何もないのに

何でビルだけがそんな

全てを負わなければいけないの？

「だったら…私がその荷を負うわ」

逃げないで前を向こう

決して楽な道ではないけれど

その先があるのかさえ分からないけれど

大切な人

もう傷付けたくはないから…

終わりの剣

「ビル！」

女王は死刑場に乗り込んだ。

そこにはたくさんの人の中で見世物の様に椅子に縛り付けられているビルがいた。

「…陛下！？何故ここに？」

そう言ったビルに近付き、女王はビルを縛っていた縄を解き始めた。

「決まってるじゃない！助けに来たのよ！」

「…陛下」

「大丈夫よ！まだ死んでない！死んでな…っ」

最後は涙で声が出なかった。

「陛下、もういいんですよ」

「良くない！だって私は納得してないもの！私は…もう…」

そう言っただけ泣いている女王をビルから離そうと周りの人が手を出してきた。

「女王陛下、ここは貴女が来る様な場所ではありません」

「そうですよ女王様。貴女様がここにいては……」

その言葉に女王は首を振った。

「嫌よ！誰がビルを置いて行くもんですか！」

泣きながらそう言った女王に対し慈悲の想いを持ちながらも人々は二人を引き離した。

「嫌！放して！ビルの所に行かせてよ！」

「女王陛下、どうか落ち着いて下さい。私達だってこんな事はしたくはないのです」

「っ！だったらどうして！」

そこで空間が固まった。

「ごめんなさい女王様…貴女様の幸せをとりあげてまで私達が幸せになろうなど、おかしいですよね。…ごめんなさい」

「それでも私達は死者を出したくないのです」

辺りが静かになった。

「……私は…別にいいの」

かすれる様な声で女王が言った。

「それでも大切な人だけは傷付けたくないの！」

女王は近でナイフを持っている人からナイフをとり上げた。

「戦争を起こさないでビルを助ける方法は一つだけあるのよ」

女王はナイフをかざした。

「ビル、ちゃんと幸せになつて」

女王は笑顔でそう言い目を閉じた。

「陛下！駄目です！陛下！！」

ビルは縛られていた縄から抜け、女王の元へ走った。

それでも間に合う事はなく

握られたナイフは女王の華奢な体に突き刺さっていた。

真実の物語

空に一筋の虹がかかる
青い空に消えそうな
綺麗な光

辺りには美しい花々が
地面を覆い尽くすまでに咲き誇っている

それでも
私が心からこの景色を美しいと思えないのは
隣に貴女がいないから

私は
もう二度と貴女に会えない事を知っています

貴女のいない世界で
私は幸せになれる事はないでしょう

きつと

貴女との約束も果たせないままです。

Dear person

Something that is possible
to meet again prays sooner or

l a t e r .

広い部屋の中、一人大きな椅子に腰掛け、ゆっくりと本を閉じた少女がいた。

金の髪を携え、白いドレスを身にまとった彼女は大きな蒼い目を閉じた。

辺りは暖炉の火で照らされているだけで他の場所は薄暗く、何があるのかさえ分からない。

「…やっぱりこの終わりもそうなるのね……」

少女はため息を吐くように呟いた。

「…表向きにはね」

その少女の後ろの方から明るい声が聞こえてきた。

「…ママ？」

振り返った少女の目に映ったのは彼女に似た女性だった。

「ママ」と呼ばれた女性は少女に微笑みかけ、近づいてきた。

「ねえ、『表向き』ってどうゆう事？裏があるの？」

近づいてきた女性に少女は尋ねた。尋ねられた女性は人差し指を立ててそつと答えた。

「裏は現実ですからね、あまり他の人に話しては駄目よ？」

そう前置きしてから少女に耳打ちをした。

「貴女が今ここに居るのは、その本のヒロインが私だからよ」

「…え？」

少し不思議そうな顔をした後、少女は何かに気づき彼女の「ママ」の顔を見た。

「さて、私の可愛い娘にはどんな好きな人がいるのかしら？」

「それは…また後日紹介いたしますわ！女王陛下！」

そう言つて少女は走つて部屋を後にした。

「ああゆう所は陛下にそっくりですね」

すぐ近くで男性の声がした。

「あら、その呼び名も久しぶりね」

「そうですね、女王」

そう言つて笑つた後、二人は少女の出て行つたドアの向こうを眺めた。

「…また誤魔化すのが大変ね」

「大丈夫ですよ、あの子も陛下に似てますから」

「そうね。相手も貴方に似てるかもね、ビル？」

「そうですね…」

肩を並べた二人は幸せそうに笑っていました。

The hoped one .

望むもの

決して諦めずに追いかけよう

真実の物語は

そう告げているから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1219c/>

The hoped one

2010年12月18日02時21分発行